リベラル・フォーラムの軌跡

1996
2
3

リベラル・フォーラム
海江田万里　五島正規
仙谷由人　　高見裕一
鳩山由紀夫　横路孝弘

リベラル・フォーラムの軌跡

1．はじめに

2．『リベラル・フォーラムの提唱』（95年7月）

3．９５年７月２５日の「リベラル・フォーラム９５」

4．９５年12月１８日のライブ・トーク

5．私たちの決意『リベラル新極へ、いま発進』（95年12月）

6．リベラル・フォーラムのメンバーたち

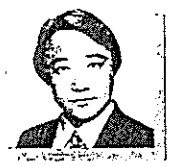
7．リベラル・フォーラムの活動経過（地域フォーラムへの参加）

8．関連資料／新聞報道、新聞広告ほか

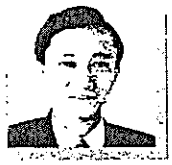
海江田 万里
衆議院議員

五島 正規
衆議院議員

仙谷 由人
前衆議院議員



高見 裕一
衆議院議員



鳩山 由紀夫
衆議院議員

横路 孝弘
前北海道知事

１９９６年月３日

はじめに

リベラル・フォーラムが活動を開始したのは、第一次村山連立政権のときであり、統一自治体選挙が一段落しようとしている９５年春のことです。

すでに同年２月１８日、高知県の五島正規議員の地元でフォーラム・メンバーによるシンポジウムが開催されていましたが、地域におけるフォーラム活動の展開は６月２１日の札幌での開催が事実上のスタートとなっています。以来、徳島、東京、香川、静岡、兵庫、等々と連続的に地域におけるフォーラムに参加もしくは開催し、日本における新しい政治の可能性を追求してきました。

この間、いわゆる中央政界でも、既存の政党が中心となって新党運動が活発化するなど、新しい政治の在り方を求める多様な動きが生まれています。リベラル・フォーラムはこれらの新党運動とも交錯しながら、地域における幅広い議論とネットワーク型の新しい政治スタイルの形成に力点をおいて取り組んできたところです。新しい風北海道、リベラル東京会議、四国市民ネットワークなどは、こうしてフォーラム・メンバー自らが既存の政党の枠を超えて地域にローカルな集団を創り出す試みから生まれたものです。

ポスト産業社会を迎えた日本社会では政治の質そのものが大きく変わろうとしています。新しい時代にふさわしい新たなスタイルの政治を創出していく課題が残されています。それは、一部の政治家や既存の政党集団によってではなく、自立する市民のネットワーク活動の中からこそ誕生するものに違いありません。私たちはそれを信じていますし、それに応える存在として今後も大いに行動していきたいと考えています。

そして、日本における新しい極を担うナショナル・パーティとローカル・パーティとがしなやかな連携と共同作業を繰り返していくことが変革の時代の力強いエネルギーとなることを期待するとともに、自らが参画する縦横のネットワークによってその形成を促していきます。

リベラル・フォーラム
海江田万里　五島正則
仙谷由人　　高見裕一
鳩山由紀夫　横路孝弘

リベラル・フォーラムの提唱

～新しいスタイルの社会と政治を求めて～

日本社会がいま変わろうとしています。

それは、自分で考え行動する自律的な市民の誕生であり、多様性を受け入れる寛容でリベラルな文化の出現です。また５千人を超える死者を出した阪神大震災では、日本社会の中に無数のボランティア活動が生まれており、「官」ではなく「民」の力が台頭しつつあることを教えています。

その背景は、新しい個人の誕生です。必要な時には、横のネットワークを結んで人々と連帯し、共同で問題の解決をはかる＜逞しい個人＞の出現であり、自己実現や自己表現を求めて行動する＜軽やかな人間＞の形成です。また、自分たちに可能なことなら、広く海外にまで出かけてボランティアを引き受ける＜活動的で優しい市民＞の登場である。物質万能主義が充満する日本社会にあって、利己主義に陥ることなく、コミュニティや地球社会のことを想う豊かな想像力を持ち合わせています。

日本社会は永い間、「長いものにはまかれろ」式の集団主義、事勿れ主義、そしてタテ社会志向の文化が根強いと指摘されてきました。政治も、企業社会も、教育システムも、個人の自由な発想や行動力を受け入れることに臆病で、専ら均一性や同質性を求める画一主義の社会を作り上げてきました。

だが、それも今や変わろうとしています。

市井の人々の自主的で自律的な社会活動が、多様性を認める寛容な文化を築き上げようとしています。地球環境問題や難民問題などでは、グローバルなネットワークが生まれています。それは、中央集権化された政党や行政システムに依存することなく、自前の政治を展開しようとする＜新しい市民精神＞の発露です。

私達はこれを言葉の正確な意味での＜日本におけるリベラリズムの誕生＞と受けとめ

たいと考えています。一部の知識人たちだけのものではなく、社会の姿としての、時代の精神としてのリベラリズムの誕生です。

そこでは、政治のスタイルも変わるでしょう。「敵」を定めて攻撃心をあおり立てるイデオロギー政治も、「自分さえよければ」といった利害政治も、新しい自由な文化の前には変化を余儀なくされるでしょう。

企業社会も変化を求められるでしょう。管理と効率のために人材を「会社人間」に仕立てるスタイル自体がもはや時代遅れのものとなるに違いありません。教育も、その画一主義から解き放たれることになるでしょう。

そして、これからの社会は「文化」、すなわち多様性と共生が基調になった新しい文化の時代を迎えることとなります。

歴史や事実を率直に受け入れる誠実な歴史意識、言語や習俗の異なる者に対して寛容で解放的な文化、人間の潜在能力を十全に開花させる懐の深い社会、そして自律的な市民の活動に応える双方向型の新しい政治文化、これらが日本におけるリベラリズムのすそ野を形成するのです。

私たちは、この日本社会の変化を敏感に受けとめ、新しいスタイルの政治を求めるリベラリストのための緩やかな集まりの場、意見交換の場としてのフォーラム（ライブトーク）の設置を提唱いたします。

日本中の新しい市民意識の担い手たちと自由で双方向のコミュニケーションができることを願って、フォーラム（ライブトーク）は、リベラリズムの視点からトピック的なテーマ、すなわち時局について講演会を開催いたします。すなわち、平成版時局講演会の開催です。

リベラル・フォーラムは、２１世紀の未来日本を語る新しいカルチャーの政治家、小説家、芸能人、批評家、スポーツマン、市民活動家、研究者、ジャーナリストなどの集いです。それは、リベラリズムの観点からの責任ある発言の場として位置づけられ、その限りにおいて、日本におけるリベラリストとしての社会的使命を引き受けようとするものです。社会がどれだけリベラルな質を備えることができるか、それを独りプロの政治家たちだけの責任とするわけにはいかないと考えます。

時代の変化を十分に読みとり、風通しのよい社会文化を自らの手で作り上げる勇気と気概が必要であると、私たちは考えます。

フォーラム（ライブトーク）は、日本におけるリベラリズム勢力の明瞭な登場を期待する人々に対する責任ある応答として設定され、展開されます。その主な対象者は、都市のホワイトカラーや女性や高齢者、農村地域のまちづくりネットワーカー、ＮＰＯ（非営利民間団体）など多様な社会活動を繰り広げる人たち、社会的関心を抱く研究者などであり、既存組織依存型の政治スタイルから自由なフットワークを展開している人たちを想定することができます。その層はかなり厚いものでしょう。私たちは、それらの新しい市民とのコミュニケーションを大切にしていきたいと考えます。

「リベラル・フォーラム」発　起　人

海江田万里	（衆議院議員）	五島正規	（衆議院議員）
仙谷由人	（前衆議院議員）	高見裕一	（衆議院議員）
鳩山由紀夫	（衆議院議員）	横路孝弘	（前北海道知事）

問い合わせ先

「リベラル・フォーラム」事務局

〒１０２　千代田区麹町４－５ＫＳビル

TEL　０３－５２７５－７０８１

フォーラム９５/7月25日

連立政権時代になって最初の参議院選挙の結果が出た直後、９５年７月２５日、千代田区紀尾井町のホテルニューオータニの「ザ・フォーラム」ホールにて、リベラル・フォーラム９５（「どこへ行く日本の政治、どう創る新しい極」）が催された。その比較的小さなスペースの会場に、８人のパネリストと２００人の市民が集った。

テレビ・カメラやスティール・カメラが熱い照明とともに周囲を取り囲み、パネリストたちを見つめるたくさんの眼が期待と希望と不安とを映し出していた。確かなことはどの眼も真剣そのものだったということだけであった。

どこへ行く 日本の政治　どう創る新しい極

パネリスト登場

仙谷由人　　*海江田万里*　　*五島正規*

鳩山由紀夫　　*船田　元*　　*横路孝弘*

高見裕一　　*高野 孟*

フォーラム９５では、「日本における民主主義の空洞化」（高見）が大きなテーマとなった。参議院選挙における著しい低投票率、「政党政治に対する市民の強い失望」（仙谷）が、「民主主義の危機、ワイマール末期を想わせる政党不信の時代」（高野）が、共通話題となり、新しい質の民主義、新しい政治勢力の重要性とその形成に向けた決意が語られた。

【討論の概要】

海江田万里

参議院選挙結果に現れた低投票率、これは既成政党全体が負けたということだ。同時に、もう一つの選択肢を提示すべき側がそれを明確に示すことができなかったことでもあり、大きな反省点だ。

政策的な争点の違いということもあるが、それ以上に、政治姿勢というか、政治文化の問題、政治家のあり方の問題ということがこれからますます大きくなるのではないか。見るからに古いタイプの政治家と政治手法、それと新しいタイプの政治家と政治スタイルということが選択肢の一つとなってくる。それが課題ではないか。この点では新進党も、自民党の中もねじれたままになっている。

第三極を創るのであれば、それは小選挙区制度を十分に踏まえて、ネットワーク型であれ何であれ地域で「三極の力」を発揮できる組織を作り出していく必要がある。私はいま、東京にそれを準備している。

横路孝弘

このままでは自民と新進の両党に収斂されてしまうことになる。その流れを止めるためにも、対抗軸をしっかり示していく必要がある。歴史観、憲法観、政府論のどれをとっても新進党や自民党にはねじれがある。政策や理念で明確な対抗軸を提示すれば、第三の極への流れを創り出すことは十分可能だ。

新しい政策軸を示すと同時に、それを具体的なパワーに換えていくためにはその政治組織のあり方も新たなスタイルのものでなければならない。そのパワーはいま地域の中に生まれている。それを「ネットワークの力」として結集していくことが求められている。

仙谷由人

極論を言えば、今回の結果は、＜自由な市民が負けて、統制をよしとする人たちが勝った＞ということになる。だた、これからは自立した自由でしなやかな市民が多く生まれてくる。これらの人たちに応える「もう一つの旗」をどう立てていけるかが問題だ。

日本ではいま、硬直した政府システムというか、硬直した資源配分の現状をどう改革していくかが最大の問題となっている。例えば、優先度の高くない農道などに配分が傾いている農業予算部分を削減して都市の生活基盤に思い切った公共投資を行うといった分かり易い政策軸を示していく必要がある。それは、市民志向の、市民が中心の政治を確立することによってしか実現できないことだ。

高野　孟

＜新進党が勝った、与党が負けた＞といっても所詮５５％の人が投票しなかった事実の方がはるかに思い。これは民主主義の危機、ワイマール末期を思わせる状況だ。他方で、日本では、これまでの中央集権型の政党が相争うといった政党政治の時代が終わりに向かいつつある。要するに、既成政党の組み合わせからからは何も変化は生まれないのであり、新しい質の政治の登場が待たれているということでもある。

政策対抗軸と同時に、やはり組織論においていままでの政党政治の延長でものを考えるのか、それとは違う次元から組み立てるのか、そこに大きなポイント、選択肢がある。市民の政治参加の新しいどう回路を創っていくかという問題がある。この議論がわりと本質的な点だと思う。いまや、政策においても組織においても、反集権ということが一つ大きな柱だ。

鳩山由紀夫

横路さんが言いましたように、ローカル・パーティのような、シングルーシューでもいいから、問題に対してしっかりした意見をもって行動しているような人たちと、縦横にネットワークを組ませていただいて、議論を深め、選挙のような具体的な場面でも協力させていだける、そんなことを何度も繰り返していくことが重要ではないか。そうした中で、相互に一緒にやっていけるという手応えをつかんでいく。ローカル・パーティとナショナル・パーティとのネットワーク的な結びつきというものをこれから大事にしていきたい。

ローカルなパーティとの連携を急がなくてはいけない。この認識に立って、さきがけという名前にこだわらず、それを捨てても構わないという姿勢で臨んでいきたい。

五島正規

選挙結果を見て、保守二大政党時代の方向が一つの流れとして見え始めたとの危機感を持っている。社会党（当時）はこの危機感からなんとかして「第三極」づくりを進めたいと考えているものの、それ自体限界があり幅広い結集ということにならない。ここにいる皆さんが第三極を立ち上げるということになれば、それに積極的に参加していくこ　とになるだろ。

政策軸という点では、今日問題になっている規制緩和についても、市場に全て委ねるのではなく、どう社会的コントロールのシステムを作り上げていくのかが焦点だ。日本の場合、北欧のようなパブリックセクターを大きくすることに対して国民に抵抗感があるので、市民の公益活動を中心としてＮＰＯ、ＮＧＯをベースに、情報公開に基づく市民の市場監視機能を含めた社会的コントロールを考えていくことが重要ではないか。

船田　元

私は、保守の中で育った人間だが、市場原理に全てを任せれば社会の不公正とかゆがみも自ずと解決するという楽観論者にはなれない。かと言って市場原理はゆがみを生み出す元凶であり、政府の干渉による結果の平等ことが正義であるという考えも時代遅れだと考えている。欲張りすぎたと言われても、やはり両方を考慮した「中間の立場」というものを追求したい。

立場上非常に言いにくいことだが、このまま保守の２極でいいのかなという疑問を持っている。結果の平等を重視する純正リベラルでも、古い保守でもない「三極」を中道的なリベラルの共通項で考えることができるのではないか。それはまだ生まれていないけれど早いスピードでできてくるではないかと思っている。

高見裕一

結局、政治不信や低投票率に対して、私たちには「共同の責任」がある。リベラル・フォーラムは、この責任に少しでも応えていこうという姿勢から、こうして皆さんと一緒に自由闊達に議論を尽くし、新しい道を模索していきたい。参議院選挙や官権政治の現実は日本の民主主義の空洞化が進行していることを示している。この流れをせき止める新しい政治勢力の実現を共にめざすことを今日の確認としたいと思います。　　（終了）

ライブ・トーク/12月18日

１９９５年１２月１８日、リベラル・フォーラムは、６人のメンバーにに加えて、作家・評論家の堺屋太一氏、ジャーナリストの下村満子氏の両人とももに、ライブ・トーク『「もう一つの日本」を求めて』を開催した。ホテル・ニューオータニ本館「鶴の間」で開かれたそのシンポジウムでは転換期に期待される政治の姿が大いに議論された。

二台の大型スクリーンには、リベラル・フォーラムが全国各地で参加してきた様々なフォーラムの軌跡が映し出されていた。ビートルズナンバーがバックミュージックとなった６人のリベラリストたちの対話シーンが多くのシンポ参加者たちの心を引き寄せた。

リベラル新極へ、いま発進
～「もう一つの日本」を求めて～

転換期に変革を担わないのは歴史に対する責任を回避することに等しいと鋭く指摘する堺屋氏らの厳しい論議に、フォーラム・メンバーが強い選択を迫られていることが浮き彫りにされた、真剣なシンポジウムとなった。

コーディネータの小倉智明氏が、さらに注文をつけた。この会場に集まっている人たちは、きれいごとよりも本物の決意を聞きたいと思っているし、会場に押し寄せたメディア関係者らは「ニュースに値する言葉」を期待している、とパネリストたちら詰め寄ったのである。

照明を小さくして落着いた風情の会場に席を埋めて専ら聞き役に徹していた参加者たちが、６人のリベラル・フォーラム・メンバーと２人のゲストのさらに明快な発言が飛び交うのを待った。

歴史の転換期を突き動かす変革者たる自覚があれば、自己の犠牲も恐れぬ姿勢を示すことが不可欠だと一人が言った。リベラリストがその大きな使命を果たすための決定的な言葉となった。